人生レッスンを楽しく

歌が育む生きる力

海沼美智子
Kaimuma Michiko
音羽ゆりかご会代表

海竜社

Kainuma Michiko
海沼美智子
音羽ゆりかご会代表

人生レッスンを楽しく

歌が育む生きる力

海竜社

〈著者紹介〉海沼美智子（かいぬま　みちこ）
1944年東京生まれ。
児童合唱団「音羽ゆりかご会」に3歳で入会、同年ＮＨＫ初放送。4歳でコロムビアレコードよりレコードデビュー。童謡歌手川田正子・孝子と共にいわゆる川田三姉妹として、放送、レコーディング、少女雑誌のグラビア等で活躍し、戦後の日本の童謡の黄金時代を築いた。
1968年3月、青山学院大学・文学部英米文学科卒業後、英国大使館に勤務。
1978年に「音羽ゆりかご会」副会長、1983年に同会代表に就任、現在に至る。
1997年3月、早稲田大学大学院・教育学研究科修士課程修了。
1997年5月より、早稲田大学教育総合研究所・特別研究員として現在に至る。
所属団体は、ハーバード大学教育学大学院（ＨＧＳＥ）プリンシパルセンター、国連大学婦人協会（ＵＮＵＷＡ）、アメリカ教育学会など。

人生レッスンを楽しく
――歌が育む生きる力――
一九九八年十一月二十一日　第一刷発行

著　者＝海沼美智子
発行者＝下村のぶ子
発行所＝株式会社　海竜社
東京都中央区築地二の十四の一　〒一〇四―〇〇四五
電　話＝東京〇三（三五四二）九六七一（代表）
郵便振替口座＝〇〇一一〇―九―四四八八六
電算写植＝盈進社
印刷＝平河工業社
製本＝大口製本印刷株式会社
落丁本・乱丁本はおとりかえします
©1998, Michiko Kainuma, Printed in Japan

ISBN4-7593-0568-8

人生レッスンを楽しく

――歌が育む生きる力――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

父と母に捧げる

はじめに

今、子どもたちの心の問題が問われ、子どもの「心の教育」の必要性がとなえられています。

現代のように複雑多難で先行きが不透明かつ低迷した時代に、私たち大人も、どのように子どもたちを教育していけばよいか悩んでいるのではないでしょうか。子どもたちに心豊かな充実した人生をおくってほしいと願わない大人はいないでしょう。

私は、『みかんの花咲く丘』や『里の秋』、『お猿のかごや』などの作曲家・海沼實（みのる）を父に、童謡歌手である川田正子・孝子を姉とする音楽一家に生まれました。父は、昭和八（一九三三）年に、東京・音羽の護国寺で、子どもの情操教育の一環として「音羽ゆりかご会」という児童合唱団を創り、私が生まれた頃は、すでにその活動は軌道に乗っていました。

それから今日までの半世紀以上にわたる長い年月の間には、多くの子どもたちが、このゆりかご会で歌うことを通して優しい気持ちや感性を育み、また、さまざまな

体験や感動を通して生きる力を培って、社会へと巣立っていきました。

日頃、父は、「子どもの『心のおやつ』になるような作品を作りたい。それも栄養があっておいしく、子どもが自分で好んで食べるおやつをね……」とよく言っていました。父は、このような独特の教育理念を持って子どもの歌作り一筋にその生涯を捧げ、そして母は、そのような父の最高の理解者であり、最強の支援者でもありました。

このような両親に育てられた私は、「これをしなさい」とか「あれをやっては駄目」などの強制やきびしい制約をされたことはなく、むしろ、常に積極的で前向きな自分流の生き方をすることを教えられました。私の話をよく聞き、意思を尊重して自由にやりたいことをやらせてくれた両親でした。

その生き方の中で私は、「たとえ失敗しても自分の力で工夫して成功するまで頑張ること」「大切なのは、自分で考え判断していくプロセス」ということを学びました。私が大きな試練や苦難にぶつかった時、父と母は時間と労力を惜しまず相談に乗ってくれ、また必要な時には、体を張って一緒に闘ってくれたものでした。

私自身も二人の子どもを育て上げた体験から、子どもの意思を尊重することと、相談相手になってあげることは、親としてとても重要な役割であると痛感しました。

この本の1章では、父のこと、父の代表的な作品が生まれた時のこと、そして父を通して私が得た心の教育について述べています。

次の2章では、「音羽ゆりかご会」の子どもたちとのふれ合いを通して心に深く刻まれたことを取り上げてみました。

3章では、私の人生の師とも言える母のこと、そして母から受けたさまざまな教育について書きました。

4章は、二人の息子を育てた私の体験です。

そして、5章では、私自身のチャレンジした経験談、失敗談を紹介させていただきました。

読者の皆様方が、ご自分の心豊かな人生や、幸せな子育てを考える時に、この本をお読みになって、何らかのヒントや指針を、わずかでもお感じになれたら、私としては望外の喜びとするところです。

最後に、この本ができ上がるまで、本当に粘り強く私を支援してくださった海竜社の平山光子さんに心から感謝致します。

海沼美智子

目次

はじめに――5

一章　美しい歌が養う子どもの心

童謡は「心のおやつ」――12

戦争のすさみを癒した歌声――19

楽譜を使わないレッスン――28

子どもの歌作り一筋に――38

本物にふれて体験させる――44

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

2章 響き合う心・伝え合う優しさ
歌が育てる感性、知恵、やる気 —— 54
合唱団の中で自分を取り戻した子どもたち —— 62
人生の喜びの時、悲しみの時を歌と共に —— 69
母親は子どもの最初の先生 —— 79
慰問コンサートでの心の通い合い —— 86

3章 人間は失敗によって賢明になる
自立心旺盛、悔しさをバネに —— 94
困った人の面倒を見、礼をつくす —— 99
子どもは磨けば磨くほど輝きが出る —— 107
勉強が遅れるより養生が大事 —— 117
休学中は読書で心の栄養を —— 125

4章 子どもの世界を楽しむしつけ
白い布地の子どもの心をどんな色に染めますか —— 132

子どもの視点を親も楽しむ――139
しつけは子どものペースに合わせて、ゆるやかに着実に――144
子どもは力いっぱい走り、泳ぎ、大声を出すことが一番――150
ボクシングを習い始めた本当の理由は？――158
我が家の一員になった雀のピーちゃん――164

5章　チャレンジ精神が開く夢の扉
ハーレム芸術学校で出会った教育者たち――172
四十八歳で大学院に挑戦――181
『エミール』との出会いは〝目からウロコ〟――187
自分のやり方で英語暗誦大会に連続優勝――194
アメリカ留学を目指して大奮闘――201

1章
美しい歌が養う子どもの心

童謡は「心のおやつ」

自然を愛する心を育てたい

からすの赤ちゃん　なぜなくの
こけこっこの　おばさんに
あかいおぼうし　ほしいよ
あかいおくつも　ほしいよ　と
かあかあ　なくのね

「からすの赤ちゃん　なぜなくの……」で始まる童謡『からすの赤ちゃん』は、父が作詞・作曲の両方を手がけた数少ない作品の一つです。どんな動物で

も「赤ちゃんは可愛い」と言う、父の優しい気持ちが全体的によく出ています。

長野県松代で生まれ、信州の美しい山々や雄大な千曲川を見て育った父は、自然をこよなく愛し、その作品の多くは、故郷の山や川、田畑などの田園風景をモチーフにしたものや、動物に対する愛情、親子のきずなどを題材にしたものです。

子どもの頃、父はよく故郷の山や川で遊んでいたようですが、ある時、近くの山の大きな木に、からすが巣を作って雛を育てているのを発見し、どうにかして巣の中を見たいと思ったそうです。

子どもにとってはかなり高い木だったようですが、ある日、とうとうその木に登ることができました。やっとのことで、巣に近い枝のところまで登りつき、首をぐっと伸ばして巣の中を覗き込んだら、中には、ふわふわした綿毛のような羽がまばらに生えた可愛い雛が、三羽いました。

その可愛らしさにしばし見とれていた時、「ギャー」というような声と共に、頭にものすごい衝撃が走りました。意表をつかれて何がなんだか分からないうちに、その衝撃は二回、三回と続きました。からすの親鳥の襲撃です。父は、

頭を両手でかばうこともできず、木にしがみついたまま、何度か親鳥に頭をつつかれ、とうとう手を離して、木から落ちてしまったそうです。

幸い、その時は、打ち身と多少の切り傷程度で大事には至りませんでしたが、父は、雛を守ろうとする時の親鳥の豹変した強さに驚嘆したそうです。

このように、昔は、自然界の動植物にふれることで、子どもたちが動物の親子の愛情などを身近で感じとり、それらを愛しむ気持ちを持つ機会がありました。父は、『からすの赤ちゃん』を通して、子どもたちに動物への愛情や、思いやりの気持ちを育んでほしいと願っていたのです。

音羽ゆりかご会（以下、ゆりかご会とします）の子どもたちに歌の指導をする時も、歌詞の中に出てくる木や草花、小鳥、昆虫、動物などの名前で、都会の子どもたちが知らないものがあると、父は楽しそうに説明をしてから歌唱指導に入ったものでした。実際、動植物の名前もよく知っていました。

また、地方への演奏旅行先で自然にふれる機会があると、子どもたちと会場や宿舎から近くに出かけては、木々や草花、そこに生息している小鳥や虫たちを見せ、よく話をしたものでした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.